

平安時代における重複型語幹の形容詞について

——かな系文学作品の用例を中心に——

東 郷 吉 男

はじめに

国語の形容詞の中には、ユユシ・コトゴトシ・オドロオドロシ・モノハカバカシなど、重複形を語幹もしくはその一部にもつ、一群の語がある。これらを語構成の面から考えると、「名詞の重複形＋し」（コトゴトシ・メメシ等）・「擬態語（重複形）＋し」（キラキラシ等）・「活用形容詞語幹の重複形＋し」（ワカワカシ等）・「動詞（その多くは連用形）＋し」（スキズキシ等）など、いくつかに分類され、また、重複部分の音節数も一音節のものから四音節のものにまでわたるが、いまこれらを一括して、「重複型語幹の形容詞」（略して「重複形容詞」と呼ぶことにする）。

これら重複形容詞については、さきに、

○竹内美智子氏「源氏物語形容詞の語構成について——その一——」

〔共立女子短期大学紀要〕10・昭41）

○塚原鉄雄・神尾暢子氏「複合形容詞の構成と表現」〔表現研究〕

6・昭42）

などで一部論及され、近くは、

○蜂矢真郷氏「重複形容詞の構成」〔同志社国文学〕19・昭56）
で論じられている。

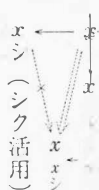
ところで、前二者は、重複形容詞そのものを論ずることを中心とされたものではなく、後者は、重複形容詞の構成を、それと対応する単独型語幹の形容詞（「単独形容詞」と略称）——ナガナガシに対するナガシーや、重複語——ナガナガシに対するナガナガシの有無、重複部分の末尾音節の種類などから考察されたもので、いずれも主として中古までの用例に基づいておられるが、資料的に限定があるように思われる。

私は、これら重複形容詞を考える場合、平安時代がひとつの注目すべき時期であると思ひ、かな系文学作品を中心に、この時代の用例を調査したところ、表Ⅰに示すとおり、異り語数一〇〇余語、延べ用例数二七〇〇余例（ほかに、派生語の用例や異本での用例から重複形容詞の存在が推定されるもの、一〇余語がある）を得た。その中には、先学の諸文献に一部洩れている語もあるようなので、用例数その他を含めて一覽表にまとめてみたが、それが表Ⅱである。

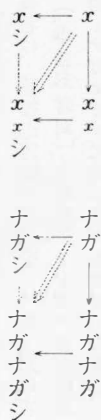
表 I

作品名	異り語数			延べ用例数		
	重複型語幹の形容詞 ^㉔	形容詞全体 ^㉕	㉔/㉕%	重複型語幹の形容詞 ^㉔	形容詞全体 ^㉕	㉔/㉕%
古今和歌集	1	99	1.0	1	584	0.2
後撰和歌集	6	97	6.2	11	828	1.3
伊勢物語	2	97	2.1	2	336	0.6
大鏡	6			10		
平中納言物語	2			2		
竹取物語	6	83	2.4	6	276	0.7
落窪物語	2			2		
宇津保物語	25			57		
源氏物語	39			189		
堤中納言物語	81	606	13.4	1,236	22,598	5.5
夜中の寝覚	14			19		
浜松中納言物語	45			150		
狭衣物語	29			89		
枕草子	43			250		
土佐日記	33	232	13.4	99	3,525	2.8
蜻蛉日記	2	61	3.3	2	194	1.0
和泉式部日記	18	210	8.6	49	1,768	2.8
紫式部日記	10			17		
更級日記	28	169	16.6	64	760	8.4
栄花物語	7	128	5.5	13	599	2.2
大鏡	43	440	9.8	343	9,486	3.6
今昔物語集	23	206	11.2	40	1,680	3.6
下記以外	7			14		
本朝世俗部	13			47		
計	106			2,712		

(㉔)・(㉕)欄の数値は注6参照。



であるとし、例外的に単独形容詞がシク活用
のもの(オトナン等)もあるが、これらはい
ずれも上代に例を見ないもので、その場合の
構成経路は、



が基本で、その場合の構成経路は、
蜂矢氏は前掲論文で重複形容詞の構成経路
について論じられた中で、重複形容詞に対
する単独形容詞があるものについては、その
単独形容詞がク活用(ナガシ等)であること

小稿はこの調査結果をもとに、先学の諸論
を参照しながら、平安時代における重複形容
詞の実態を、自分なりに探ってみようとする
ものである。

と見るべきであると説かれる。

前者(単独形容詞がク活用)の場合、例えばナガナガンは、ナガ↓ナガナガ↓ナガナガシと、ナガ↓ナガシ↓ナガナガシとのいずれが成立経路としてより妥当なのか、残念ながら、現在の私はそれを判断するに十分な資料を持ち合わせていない。しかし、後者(単独形容詞がシク活用)の場合、氏の結論にはいささか従いたいものがある。

すなわち、氏の掲げられる例、ヲサヲサシ・オトナオトナシ・モノモノシ・オホヤケオホヤケシについて考えてみるに、ヲサヲサシの場合は、なるほど、ヲサヲサに、

(7) 頭つき、髪のかゝりばしも、美しげにめでたしと、思ひ聞こゆる人くにも、をさく劣るまじう、
 △源・末摘・(一) 257 V
 など、下に打消を伴う多くの例があるほか、

(4) よろづの人の「婿になり給へ」と、ヲさく聞え給へども、さも物し給はず。
 △宇津・藤原の君・(一) 178 V

のように、それを伴わない用例もあって、辞書類にも、ヲサ(長)を重ねた語と説かれており、一方、ヲサシの例は、疑問の残る、

(9) 御心の賢く、政事をさしく、暴ル兵、獣も、この主には鎮まりぬ。
 △宇津・藤原の君・(一) 188 V

くらいしか見当たらないから、氏の論が当たるように思われる。しかし、オトナオトナシ以下の場合、事情が全く異なるのである。すなわち、オトナ・モノ・オホヤケの重複形、オトナオトナ・モノモノ・オホヤケオホヤケといった例が全く見られないのに対し、オトナシ・モノシの用例は、源氏物語をはじめ、多くの作品にしばしば現れ、オホヤケシも、氏の指摘される枕草子(一例)以外に、

(2) 内侍の督の君ぞ、さすがに、おほやけしき御まじらひにて、
 △寝覚・五・326 V

(4) 扇どもの目も及ばぬを、あまりおほやけしからぬ物かなと愛でさせ給に、
 △狭衣・四・438 V

など数例が見られ、決して珍しいものとはいえない。してみると、重複形容詞の成立経路を想定する際に、少なくともこれらそれに対応する単独形容詞がシク活用のもについては、頭在化していないオトナオトナなどを想定して、例えば、オトナ↓オトナオトナ↓オトナオトナシと考えるよりは、オトナ↓オトナシ↓オトナオトナシと見る方が、妥当性が大きいと考えるのである。

二

重複形容詞の活用は、すべてシク活用であるといわれている。^{注6}これに対して、私の調査で疑問の残るものは、

(4) 藤壺「時の人ぞや。心いとよしとていとらうくたウし給フ。

……中納言殿は、いとさゝやかになれたる人のらうくじきなり。……」などの給フ。
 △宇津・園讀上・(二) 118 V

のラウラウタシと、
 (4) (源)「この宮仕へを(玉鬘は)しぶくげにこそ思ひ給へれ。

……」などの給へば、
 △源・藤袴・(二) 104 V

(4) 入道殿、この弟殿に、「そこは申されぬか」とのたまはせければ、「左衛門督の申さるれば、いかゞは」と、しぶくげに申給けるに、
 △大鏡・三・160 V

から存在の推定されるシブシブシとであった。いま、これらを検討するに、(4)は、岩波版大系本に衍入とあるごとく、「いとらうたう

表Ⅱ

語	落窪物語語	宇津保物語語	源氏物語語	夜の寝覚	浜松中納言物語語	狭衣物語	枕草子	蜻蛉日記	紫式部日記	栄花物語語	大鏡	今昔物語集		その他の	合計	内訳					派生語 (外数)
												右以外	本朝世俗			地の文	会話文	心語	消息文	和歌等	
ゆ	8	29	102	26	13	49	9	13	6	96	3		2	13	369	212	110	28	6	13	(23)
は	9	10	102	13	9	38	2		3	20	4	7	17	5	239	111	105	20	3		(1)
おどろ	2	4	70	12	6	11	9	5	5	68	6		1	3	202	150	41	11			(3)
こと	1	9	113	11	10	9	3	4	5	8	1		7	3	184	113	61	8	2		(10)
さいと	3	23	81	2		1	9	3	2	10	4		1	3	142	56	70	16			(10)
いと	2	5	34	5	7	11		1	1	20				7	93	65	9	5	1	13	(1)
らう	1	23	32	1	2	2	3		4	7	2			2	79	61	16	2			(4)
つき	1	1	27	6	2	5	9	2	2	7	1	1	4	2	70	56	12	2			(3)
すき		1	42		5	1	7		1	4			1	2	64	20	38	5	1		(7)
もの	5	7	29	1	1	1	2		4	11					61	52	5	4			(2)
か			49			5	1							2	57	21	22	14			(1)
わ	1	3	38	5		3		1		1				2	54	11	31	10	2		(3)
う	2	6	23	2	2	10		1	1	1	1				49	15	28	1	5		(1)
か		1	29	7	2	3				2	2			3	49	12	23	14			(2)
きた	4	4	14	1	1	2	6	4	2	1			1	4	46	34	10	2			
た		1	24	4	1	10	3		2						45	28	12	2	1	2	(10)
ひ	1	1	27	1	5	7				2				1	45	10	27	7	1		(1)
ない			26	6		3		2	2	1					40	19	13	8			
い			9	2	1	10				9	2	1	4		38	21	13	2	2		(1)
う		1	24	2		3	2		1	1				3	37	13	20	4			(4)
ま	1	7	6	2	1	2	3	5		8				2	37	18	18		1		(1)
た		7	14	3	2	1	1	1			1			4	34	4	26	4			(1)
お	2	10	16	1					1	4				4	34	28	5	1			
あ		5	10		2	11	4								32	22	9	1			(3)

は	れ	し		16	4	1	5	1		4	4	1		32	22	9		1	(1)
ゆ	ゑ	し	3	11	1		2			6	6	1		31	24	4	3		(4)
ひ	と	し		9	3	2		5	1	1	1		1	30	7	18	4	1	
か	ど	し		16			3			7	1		1	29	20	6	3		(5)
は	れ	し	1	12	3	3	4				1			28	14	12	1	1	(1)
あ	は	し		15			7	1		1	1		2	28	6	12	10		
す	が	し		8	1	3	1				12		2	28	24	3	1		
お	も	し	1	18				1			3			23	16	6	1		
を	を	し		12				1			9			22	16	5	1		
す	く	し		16	2			1			2			21	16	4	1		
な	か	し	1	11	2		2					1	1	20	8	9	2	1	(2)
か	れ	し		1			11			5				17	11	1	5		(1)
く	だ	し		11	2	1	1				2			17	9	7	1		(1)
ま	め	し		12				1					2	16	6	7	3		(1)
な	き	け		10	2		2				1			15	12	2	1		
ほ	と	し		3						1		2	1	14	8	6			
あ	だ	し		4		1	2			1	1		2	13	4	7	2		(1)
き	は	し		8	2			2						12	6	2	4		
よ	し	し	1	7	2	1				1				12	12				
か	け	し		9			2							11	3	4	3	1	(1)
そ	く	し		4		2	1			2				10	5	3	1		(1)
く	せ	し		1	1		1		1	1	3	1		10	7	3			
び	え	し		1	1			2	2	1	2			9	6	3			
は	え	し		2	1	1		3			1			8	7		1		(2)
こ	は	し		6			1					1		8	5	2	1		(1)
ほ	け	し		5			1					1		8	4	3	1		(1)
か	う	し	1	4			1	2			1			8	7	1			(1)
こ	ち	し		4	1								1	6	4	1	1		(1)
こ	こ	し	1	3		1								6	3	3			
し	な	し		3	1					1				6	4	1	1		
む	べ	し		5				1		1				6	5	1			

語	落窪物語	宇津保物語	源氏物語	夜の寝覚	浜松中納言物語	狭衣物語	枕草子	蜻蛉日記	紫式部日記	栄花物語	大鏡	今昔物語集		その他	合計	内訳					派生語 (外数)	
												右以外	本朝世俗			地の文	会話文	心語	消息文	和歌等		
め			4							1					6	4			2			
おほし			5				1								5	4	1					(2)
おほし			2	1											4	2	2					(1)
おほく			3	1											4	1	3					(1)
おほく			2			1				1					4	2	2					
おほく			2						1						4	2	1	1				
おほく			2	1								1			4	3	1					
おほく			3									1			4	2	2					
おほく			4				1		1			1			4	2	1	1				
おほく			1									1			4	3	1					
おほく			1									1			4	1	1	1			1	
おほく			3									2			4	1	1	1				
おほく			3												3	1	2					
おほく			3												3	2	2	1				
おほく		1	1				1								3	2	1					
おほく			1					1							3	2	1					
おほく			1							1					2	1	1					(1)
おほく			1							※2					2	1		1				
おほく			1			1									2	1	1					
おほく			1											1	2	2			1			1
おほく			1											2	2	2					2	
おほく			1				2							1	2	2	2					
おほく			1												2	1	1					(1)
おほく		1													1	1		1				

れは、形容詞のク活用が状態を表わし、シク活用が情意をあらわすという一般概念に背反する。

としつとも、これらは「例外ではな」く、「状態的素材の情意的対象規定として理解すべき」で、「対象規定の方法が表現素材の性質から規定されず、主体の把握として実現したものである」と説いておられる。

また、ク活用形容詞の語幹を重複させた形の重複形容詞について、蜂矢真郷氏は、「(ク活用形容詞の語幹を)重ねることは、より客観的な情態的意義を内面化して、より主観的な情態的意義へ押し進める過程を示してゐる」という橋本四郎氏の論を承けて、「ただ、重複することが直ちに『情意』を表わすのではな」く、「むしろ重複することよりシを伴ってシク活用形容詞を構成する点に『情意』を表わすポイントがあるのではないか」と述べられた。

そもそも、一々の形容詞の意味内容を、状態性・情意性のいずれかに截然と分かつことは、特にその境界近くにおいて、かなり困難なことで、結局は傾向という域を出ないかと思われるけれども、いま、重複形容詞の意味を、具体的な用例に即して考えてみると、それらが、情意性を濃厚に含む語であることは確かである。一見、対象の状態的属性を表わすかに見える場合でも、よく考えると、そこに、微妙な心理的ニュアンスを伴った、言語主体の情意を多分に感じさせられることが多い。

以下、若干の具体例を挙げてそのことを立証し、併せて、それが何に基因するののか、その点についての考察を加えたいと思う。

1 同一語基をもつク活用単独形容詞との比較において

(例)その又の日の曉より、風いみじう吹き、潮たかう満ちて、浪の

音あらき事、巖も山も残るまじき気色なり。

△源・明石・(二)59▽

(例)京のかたのみ思ひやらるゝに、かへる波もうらやましく心細きに、舟子どもの、あら／＼しき声にて、「うら悲しくも、遠くも来にけるかな」と謡ふを聞くまゝに、ふたりさしむかひて泣きけり。

△源・玉鬘・(二)31▽

(例)老女房)「……(大君は)たゞ、人に遠くて生ひ出でさせ給ふめれば、……」

△源・総角・(四)406▽

(例)薰君)「(御身は私を)遠く／＼し／＼のみもてなさせ給へば、……」

△源・総角・(四)383▽

(例) (例)を比較するに、(例)は、嵐の日の波の音をあらきと形容したもので、轟音という感じの、物理的に大きい音を表現しているが、(例)の方は、舟子どもの声とはいえ、「うら悲しくも、遠くも来にけるかな」と謡って、都育ちの娘たちの涙を誘った声であるから、まさか大声でどなったはずはなく、船頭たちの下卑た声であることをあらあらしきで表現したものと考えられ、そこに、作者の情意が多分に含まれているのが看取される。

(例) (例)の場合も、(例)が「物理的・客観的に人から離れて」の意であるのに対して、(例)は「心理的に距離感を置いて」の意に用いられている。

このほか、アハシとアアアハシ、ウトシとウトウトシ、オモシとオモオモシ、カロシとカログロシ、コハシとコハゴハシ、チカシとチカチカシ、ナガシとナガナガシ、ナホシとナホナホシ、フルシとフルブルシ、ワカシとワカワカシなどの用例を比較してもほぼ同様で、重複型のものは、物理的・客観的な状態ではなく、言語主体が

「……と感じる」状態を表わしており、そこに情意性の深さを指摘し得るのである。

ただ、この場合、その情意性は、同一語基を重複させることによって生まれたのか、それがシを伴ってシク活用形容詞となることによって生じたのか、それを判断することは困難である。

2 同一語基をもつシク活用単独形容詞との比較において

- (×) (朱雀は) おとなしき (女三の) 御乳母ども召し出で、御蒙着のほどの事などのたまはずついでに、△源・若菜上・(白)219 V (女三の) 女房などもおとなしきは少なく、若やかなるかたち人の、ひたふるにうち花やぎ、ざればめるはいと多く、

△源・若菜上・(白)301 V

(×) まことしう清げなる人の、……ひさしう寝起きたるまゝに、母屋よりすこしゐざり出でたる、……まことにめでたし。

△枕・二〇〇段・243 V

(例) たのもしきもの……心地などのむつかしきころ、まことまことしき思ひ人のいひなぐさめたる。

△枕・二六六段・275 V

この種の例(ほかに、オホヤケシとオホヤケオホヤケシ、ケシとケケシ、モノシとモノモノシ等)は多くないが、それぞれともにシク活用でありながら、やはり重複形容詞の方が、言語主体の情意をより強く感じさせるようである。

右の例でいうと、(×)が年齢的・経験的に老成した乳母の意であるのに対し、(例)は、年齢や経験の面もさることながら、内面性の面からいって、真におとなしの語に匹敵する女房は少ないといった意に解される。

(例)において、それが一層明瞭である。すなわち、(例)のマコ

トマコトシは、気分のすぐれぬ時にやさしくことばをかけ、たのもしいと思わせてくれる思ひ人を形容する語であるから、清げなる人に対する作者の冷静な観察眼の窺える(例)のマコトシに比して、作者の情意がより多く含まれていると考えられる。

ところで、この場合の重複形容詞の情意性の濃厚さは何に基因するのだろうか。私は、これらの場合、シク活用単独形容詞がすでに持っていた情意的意味が、同一語基を重複させることによって、さらに強め深められた結果であると考えたい。

3 同一語基をもつ「重複形十」と「型副詞との比較において

重複形容詞の中には、同じ時代において、それと同一の語基をもつ「重複形十」と「型副詞と共存しているものがある。

その中には、

(例) (母后は) 思しつゝみて、(藤壺入内を) すがくしも思したゝざりける程に、后も失せ給ひぬ。

△源・桐壺・(一)46 V

(例) 兵部卿宮、(姫の入内を) すがくともえ思したゝず、……待ちすぐし給ふ。

△源・絵合・(一)175 V

のように、相似た場面・文脈の中で用いられ、一見、両者間に意味的な違いを見出すのが困難な例もあるが、さらに検討してみると、これら両者間の比較から、重複形容詞の情意性によって来たるところを推定し得るような例を見出すのである。

以下、キラキラトとキラキラシを例にとりあげつつ、その点について述べてみたい。

私が調査した資料の中で見られる両者の用例は、キラキラト一六、キラキラシ四六例(表Ⅲ参照)であるが、うち、キラキラトは、

表 III

語 対 象 の と ら え か た 作 品 名	きらきらと			きらきらし				合 的 覚 感 感 言 語 主 体 の 情 意 を 含 む も の
	視	覚	聴	視	覚	聴	覚	
落 窪 物 語						3		1
宇 津 保 物 語	1				4			
源 氏 物 語	4			1	11			3
夜 の 寝 覚					1			
浜 松 中 納 言 物 語					1			
狭 衣 物 語	3		1		2			
枕 草 子	1				1	3		2
蜻 蛉 日 記						4		
紫 式 部 日 記	2					2		
更 級 日 記						2		
栄 花 物 語						1		
今 昔 物 語 集	3					3		2
計	14	0	1	1	1	37	0	4
	16				46			

以外の例は、

(×)言葉つかひきら〜と、
(柏木に)まがふべくもあらぬ事どもあり。

△源・若菜下・(394)▽

(例)(女房の中には)きら〜とことさらび笑ひ入りつつ、しはぶき入ぬるもあり。 △狭衣・一・86▽

の二例に過ぎないが、キラキラトを擬声語として用いた(例)の例も、女房たちのわざとらしく派手な笑い声を聴覚の表面でとらえたもので、対象の属性を表面的・客観的に把握した表現である点では、先述の多くの例と共に

(イ)人もなく、月の顔のみきら〜として、夢の心地もせず。

△源・明石・(62)▽

(ロ)葉はいと青やかにて、露きら〜と、玉のやうに見えわたる。

△源・若菜下・(388)▽

(ハ)山は鏡をかけたるやうに、きら〜と夕日に輝きたるに、

△源・浮舟・(239)▽

(ニ)御あかしの、……おそろしきまで燃えたるに、仏のきらきらと見え給へるは、
△枕・一二〇段・174▽

など、光線の輝きを視覚の表面でとらえたものがほとんどで、それ

通するものがある。

一方、キラキラシには、すでに東節夫氏の論^{注14}があり、それを要約すると、

① 上代のキラキラシは、婦女子の容貌を対象に、華麗さに加え、表現主体の心理に清潔感を伴う視覚美を表現する。

② 平安朝仮名文学のキラキラシは、上代に比して、「清げ」なる要素を稀薄にし、代りに「いつかし」さを加えた美的心象を表現する。

③ 中世には、聴覚的印象に基づくキラキラシの使用例が多く見ら

れる。

となり、結論として、この語は「対象の客観的な属性の単なる受容でなく、表現主体の価値感情を伴って規定される語」とされている。

いま、私の調査したキラキラシの用例を見ると、先のキラキラトに多く見られる、光線の輝きを視覚の表面でとらえた例は、

(イ) ゆづり葉の、いみじうふさやかにつやめき、茎はいとあかく、

きらきらしく見えたるこそ、あやしけれどをかし。

△枕・四〇段・89 V

の一例のみで、他はすべて、言語主体の情意（東氏のいわれる「表現主体の価値感情」を含むと考えられるものである。

キラキラシの対象とするものは、視覚に関するものでは、人物の容姿・態度・生活状態、

いみめきらしくしき四位・五位、数をつくして参り集ひたり。

△宇津・楼上下・(二)464 V

(ロ) (玉鬘は) 隈なく匂ひきらしく、見まほしきさまぞし給へる。

△源・初音・(二)381 V

(ハ) (内大臣の) 御もてなし、あな、きらしくしと見え給へるに、

△源・行幸・(二)79 V

(ニ) きら／＼しう今めいて (生活する) などは、えあらぬにや、

△源・東屋・(四)133 V

(ホ) 人いとおほく、きら／＼しうてものおすめり。△蜻蛉・中・244 V

(シ) きらきらしきもの 大将の御さき追ひたる。孔雀経の御読経。御修法。……

△枕・二九五段・309 V

(ク) きよげなる立文もたせたる男などの、……堂童子など呼ぶ声、山彦ひびきあひて、きら／＼しう聞ゆ。△枕・一二〇段・175 V

(ケ) オソバエタル者ノ口聞き綱とシク、△今昔・二十七ノ十三・(四)491 V 人物の性格・人からの思われに用いた例には、

(イ) (内大臣の) 人がら、いとすくよかにきら／＼しくて、心もちひなども賢くものし給ふ。△源・乙女・(二)284 V

(ロ) (花散里は) 此まちのおほえきら／＼しとおぼしたる。△源・螢・(二)429 V

などがあるが、それらをキラキラシと捉えるのは、表面的な感覚でなく、言語主体の内面的情意であることは確かである。

以上、同一語基をもつキラキラトとキラキラシにおいて、前者が対象の状態を表面的・感覚的に、後者が内面的・情意的に捉える語であることを明らかにしたが、これは重複形容詞の情意的性によって来たるところを示唆していると思う。すなわち、私は、重複形容詞の情意的性が、同一語基の重複に基因するのではなく、それがシを伴ってシク活用形容詞となることによって生じたとする蜂矢氏の考えを支持し、その論拠のひとつとして右の結果を挙げたいと思うのである。

四

重複形容詞の使用頻度をみるに、私の調査資料では、源氏物語において、異り語数八一、延べ用例数一二三五ときわだって多く、全

体に占める割合は、異り語数で七六%、延べ用例数で四六%に達する。続いて、異り語数では、夜の寝覚四五、袂衣物語・栄花物語四三、宇津保物語三八、枕草子三三の順、延べ用例数では、栄花物語三四三、袂衣物語二五〇、宇津保物語一八八、夜の寝覚一五〇、枕草子九九の順となり、創作物語系列の諸作品、歴史物語・随筆を含めて、女流による作品に多く現れる傾向が見える。一方、使用の稀な作品をみると、竹取物語オドロオドロシ・タイダイシ各一例、今昔物語集、特にその本朝世俗部以外の異り語数七、延べ用例数一四などが注目される。

かな日記では、紫式部日記にその使用が目立っている。そこでの異り語数二八、延べ用例数六四という数値は、作品の長短を考慮するとかなり高いもので、作品中の全形容詞に占める割合では、異り語数・延べ用例数ともに、この日記が最高の値を示すことになる。^{注15}
(表Iの(A)(B)・(C)(D)の欄参照)。次いで、蜻蛉日記の異り語数一八、延べ用例数四九となり、一方、土佐日記では、コチゴチシ・ホトホトシ各一例と僅少で、ここでも女流の手にかかる作品に多用される傾向が見られる。

和歌の中では、ユユシ・イトドシなどごく一部の語を除いて、稀にしか用いられない。従って歌集や歌物語には用例が僅少である。ただ、ナマナマシが「なまなまし身」の形で、和歌にのみ二例現れるのは特異である。

散文中に用いられる重複形容詞の多くは、地の文・会話文(心語を含む以下同様)のいずれでも使用されているが、そのうち、地の文での用例の割合が特に多い語(地の文での用例数が全用例数の七〇%以上のもの)と、会話文での用例が多い語(会話文での用例

数が全用例数の五〇%を超えるもの)とを、それぞれ、延べ用例数一〇以上の語から拾ってみると、次のとおりである。

- (1)地の文での用例の割合が特に多い語
ヨシヨシシ・スガスガシ・モノモノシ・オトナオトナシ・ナサケナサケシ・ツキヅキシ・ユエユエシ・ラウラウジ・スクスクシ・オドロオドロシ・キラキラシ・ヲラシ・クセグセシ

(2)会話文での用例の割合が多い語

- タイダイシ・アハアハシ・ワカワカシ・ヒガヒガシ・カログロシ・ヒトヒトシ・アダアダシ・スキズキシ・ウヒウヒシ・カケカケシ・カルガルシ・マメマメシ・サウザウシ・ウトウトシ・ナレナレシ・ナホナホシ
(それぞれ高率順)

いま、(1)・(2)に属する語を語構成の面から考えてみると、(1)に、「名詞の重複形+し」や「擬態語(重複形+し)」が多く、「ク活用形容詞語幹の重複形+し」が見られないこと、(2)には、逆に「ク活用形容詞語幹の重複形+し」や、動詞に由来する語が多いことに気づくが、この点はひとつの傾向と認めてよからうかと思う。

概括するに、重複形容詞は、漢文訓読臭が薄く古伝説・説話に素材を求めることの少ない、女流の散文に用いられることが多く、特に紫式部の文章で多用されている。このことは、先述した意味上の特長とも関連して、女流の文体、殊に紫式部の文体の特質を解明する上で、ひとつの手がかりともなろう。また、地の文で多用されるものと、会話文に現れやすいものとの間には、語構成の面からみて、ある種のかたよりが認められる。

なお、栄花物語では重複形容詞の使用がほとんど地の文に限られ、会話文にはごく稀にしか現れない(表IV参照)。これは、栄花

表 IV

		地の文	会話文	心 語	消息文	和 歌	計
計	実数	1,513	904	232	30	33	2,712
	%	55.8	33.3	8.6	1.1	1.2	100.0
源氏物語	実数	624	464	131	13	4	1,236
	%	50.5	37.5	10.6	1.1	0.3	100.0
栄花物語	実数	305	27	8	0	3	343
	%	88.9	7.9	2.3	0	0.9	100.0

のように、類型的・表面的記述ですまされ、それぞれの場における話し手の心理の深層、微妙な心の變に立ち入った表現に乏しいという点に由来するかと思うが、なお、機を改めて考えたい。

ま と め

小稿で検討した結果をまとめておくと、次のとおりである。

物語の会話文が多くの場合、

○殿の御前、「宮をむすめて持ち奉りたる、まろ恥ならず。まろを父にて

持ち給へる、宮わろからず。又母もいとさいはひ

あり、よきおとこ持給へり」など、戯れ宣はするを、ハはつはな・(上)273V

○上の女房達、……宮／＼の御有様を聞えあへり。

「猶この御中に、式部卿の宮は心ことにおはしますかし」など聞ゆれば、

「さて中務の宮はわろくやおはします」「兵部卿の宮はうつくしうおはし

ます」など、各思ひ／＼に聞えさするもおかし。

ハひかげのかづら・(上)322V

1 それと対応する単独形容詞がシク活用である重複形容詞(モノモノシ・オトナオトナシ等)の成立経路は、例えば、モノ↓モノノ↓モノモノシでなく、モノ↓モノシ↓モノモノシと考えるべきである。

2 重複形容詞の活用はすべてシク活用であるとされているが、私の調査でも、ク活用の確かな例は見出せなかった。

3 重複形容詞は、総体的に、言語主体の情意を濃厚に含む語であると考えられる。そして、その情意性の基因するところが、同一語基の重複にあるのか、それがシを伴ってシク活用形容詞となることにあるのかという点に関しては、私は後者と考え、その論拠のひとつとして、キラキラト・キラキラシの比較結果を掲げた。

なお、対応する単独形容詞がシク活用である重複形容詞の場合には、シク活用単独形容詞がすでに持っていた情意性が、同一語基の重複によって強調され、より深められることを例証した。

4 重複形容詞は、女流の手になる散文の中で用いられることが多く、特に紫式部の文章で多用される傾向がある。地の文・会話文(心語を含む)いずれにも用いられるが、地の文に頻出する語と、会話文に現れやすい語とを比較すると、両者間に語構成面でのある種のかたよりが認められる。和歌には、ごく一部の語を除き、稀にしか用いられない。

○調査には、岩波版「日本古典文学大系」を用い、引例の際は巻・ページを示した。ただし、後撰和歌集のみは、『後撰和歌集総索引』(昭40・大阪女子大学)を用いた。なお、各種索引を参照したが、統計数値などすべて右記資料に従ったので、索引類と数を異にする

ものがある。

注1 疑問のある語(表IIの※印)も一応含めて扱った。派生語等から存在の推定されるこの種の形容詞を外数で扱い、合計数に含めていないので、それと併せ考えると、数値的にさほど都合はないと思う。

注2 塚原・神尾論文の註、『日本文法大辞典』(昭46・明治書院)の接辞の項(白藤礼幸)、『品詞別日本文法講座』4(昭48・同)の資料1(林巨樹ほか)、慶野正次『形容詞の研究』(昭51・笠間書院)、蜂矢論文56〜57ページ、など。

なお、『日本文法大辞典』では、カドカドシ(才々)とカドカドシ(角々)、ビビシ(便々)とビビシ(美々)、ホトホトシとホドホドシを別語とするが、小稿ではそれに従わなかった。

注3 例えば、『日本国語大辞典』『岩波古語辞典』など。

注4 該当部分「政事をさして」とある本もある。八岩波版大系本・『宇津保物語本文と索引』本文編(昭48・笠間書院)43(161)ページ参照

注5 現在のところ管見に入ったのは、枕草子・夜の寝覚・浜松中納言物語・狭衣物語(二例)の計五例。

注6 竹内論文22ページ、塚原・神尾論文52ページ、蜂矢論文55ページ。

注7 『源氏物語大成』巻二校異編922ページ、岩波版大系本校異(三)467ページ。

注8 大坪併治『訓点資料の研究』(昭43・風間書房)346ページに、高野山龍光院威妙法蓮華經古点の、

○脣(中略)不二^ア眞ク^ク洗^シシ^シカ^カシ。

の例が紹介されており、「これはシブシブを形容詞化した珍しい

い例」とある。

なお、私の調査した資料になくて、この時代の訓点資料に見える語として、ヤムヤムシ・ワキワキシ・ツキテツキテシ八東大寺諷誦文稿Ⅱ中田祝夫『東大寺諷誦文稿の国語学的研究』(昭44・風間書房)Ⅴ、ワイワイシ八石山寺旧藏法華經玄賛古点Ⅱ春日政治『古訓点の研究』(昭31・同)Ⅴ、カマカマシ・サクサクシ・セハセハシ・セバセバシ・ヤウヤウシ・ヤツヤツシ・ユヒユヒシ・ワワシ八類聚名義抄観智院本Ⅱ蜂矢論文Ⅴなどが挙げられよう。

注9 深シ(イ)・近シ(イ)・古シ(イ)など、ク・シク両活用をもつ形容詞の例が、室町期ごろから現れる八鳥居裕美・鈴木博「蒙求抄の先抄本の用語についての小考」(『滋賀大園文』19・昭56)に論ありⅤが、平安時代には見当らないようである。もし、シブシブシが両活用をもつとすれば、早い時期の珍しい例となろう。

注10 山本俊英「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」(『国語学』23・昭30)

注11 橋本四郎「ク活用形容詞とシク活用形容詞」(『女子大園文』5・昭32)

注12 蜂矢真郷「語の文法的構成——疊語について——」(『万葉』86・昭49)

注13 東節夫「形容詞『きら／＼し』考」(『防衛大学校紀要』18・昭45)は、(ネ)のキラキラトを別語とするが、いま、これに従わない。

注14 前掲論文。

注15 表Iの(B)・(D)の数値は、宮島達夫『古典対照語い表』(昭46・笠間書院)に依った。ただし、栄花物語のみ、武藤宏子「栄花

作品名	異り語数	延べ語数	調査者(所収文献)
古今和歌集	96	581	滝沢貞夫(学燈社「国文学」2の7)
竹取物語	△ 105		大野 晋(『国語学』24)
源氏物語	△ 1,130		" (")
"	2,052		角井英子(『女子大國文』37)
夜の寝覚	△ 606		稲賀敬二(『国語と国文学』36の4)
浜松中納言物語	△ 528		" (")
枕草子	△ 349		大野 晋(上掲)
"	263	3,484	慶野正次(『形容詞の研究』196へ)
土佐日記	△ 66		大野 晋(上掲)
蜻蛉日記	△ 318		伊牟田経久(広島女子短大「研究紀要」14)
和泉式部日記 (三条西家本)	△ 130		" (")
"	120		竹内美智子(『国文目白』2)
和泉式部日記	△ 222		大野 晋(上掲)
"	200		竹内美智子(『国語学』53)
更級日記	△ 163		伊牟田経久(上掲)

△印はカリ活用を別語として扱う。

物語の語彙の研究」(『学習院大学国語国文学会誌』7・昭38)のかり活用を別語としない数値に依った。このほか、諸家の論考に示された形容詞語彙数は次のとおりであるが、これらを含めて考えても同じことがいえる。

△付記V

本稿は、昭和五十六年国語学会春季大会(甲南女子大)での口頭発表をもとに、かなりの部分を書き改めたものです。当日およびその前後にわたって貴重な御示教を賜りました吉田金彦先生・鈴木博先生・北原保雄先生はじめ諸先生方に、心から厚く御礼申しあげます。

— 京都市立伏見工業高等学校教諭 —